

デザインプロセスにおける当事者のデザイン態度

—グッドデザイン賞受賞者にみる5つの態度と社会へのまなざし

Common Design Attitudes Among Individuals Who Take Initiative to Address and Solve Their Own Challenges: Five Attitudes and Social Perspectives of the Good Design Award Recipients

塚田真一郎

Shinichiro Tsukada

公益財団日本デザイン振興会

Abstract : This study aimed to identify the design attitudes of individuals who addressed personal challenges through creative practices, with a focus on recipients of the Good Design Award. Analysis revealed five common attitudes: (1) critical thinking and pursuit of essence, (2) fostering collaboration and co-creation, (3) commitment to simplicity and continuous practice, (4)

empathy and respect for humanity, and (5) embracing new challenges with flexible thinking. These attitudes were underpinned by a shared belief in creating societal value, indicating the potential for individuals —regardless of professional expertise— to make meaningful contributions to society through design.

Key Word : Design Attitude, Good Design Award

1. 研究の背景と目的

「デザイン」として取り扱われる概念は、主にプロダクトを中心とする意匠や造形を主とする分野だけでなく、取り組みやシステムを含む物体を伴わない領域へと拡張している。日本で唯一の総合的なデザイン評価・推奨の仕組みである「グッドデザイン賞」（主催：公益財団法人日本デザイン振興会）においても、最高賞である「グッドデザイン大賞」に、2018年度には貧困問題解決に向けてのお寺の活動「おてらおやつクラブ」が、2022年度には地域で子ども達の成長を支える活動「まほうの다가しやチロル堂」が選ばれるなど、物自体の意匠や機能だけでなく、その取り組みやシステムが社会に及ぼす影響を評価されるものが上位に選ばれるようになってきている。

このようにデザインに関連する分野が拡大する状況においては、デザイン教育を受けデザインの技術や知識を持つ人や、専門職としてデザインに携わっている人だけでなく、非専門職であっても、デザインの主体となる機会が増えていくと考えられる。そうしたさまざまな背景を持つ人々がデザインに携わる際に必要となる要素には、デザイナーの持つ考え方の枠組みを参考にするにとともに、技術的な要素にとどまることのない、その人自身がデザインに向き合う際の態度が挙げられる。そこで、本研究では、「デザイン態度 (design attitude)」という概念に着目した。

デザイン態度はデザインのアプローチを経営学に応用しようとする考え方として、Boland & Collopy (2004) によって提唱された。このデザイン態度を、特にデザインのプロフェッショナル集団に共通して見られるものとして捉えたのが、Michlewski (2015) であり、次の5つの要素を持つと定義付けた：①不確実性やあいまいさを受け入れる、②深い共感に従事する、③五感を駆使する、④遊び心を持ってものごとに命を吹き込む、⑤複雑性から新たな意味を見出す。安藤 (2018) は、Michlewski (2015) の研究を展開し、日本国内とイタリアでそれぞれ活動する日本人プロフェッショナルデザイナーの持つデザイン態度として、①新しい文化や意味を創造する、②喜びを与える、③論理性を重視する、④深い洞察を得る、⑤美しさを追求する、⑥あいまい性を保持するという6つの要素を抽出した。

一方、八重樫 (2021) が指摘する通り、これまでの研究では、専門家としてのデザイナーに焦点が当てられ、企業組織におけるデザイナーに求められる役割、能力、業務実態などは多くの研究

において検討されてきたが、デザインを専門としない人々を対象に、そのデザインにおける能力等を検討している研究はいまだ少ない。そこで本研究ではまず、専門職としてのデザイナーであるか否かにかかわらず、デザインに臨む際の態度がデザインの成果物としての質を高めるとともに、関与する人たちの満足度を高めるために重要なのではないかという問いを立てた。そして、優れたデザインを生み出している人々が持つ、デザインプロセスにおける共通する態度を見出すことで、事にあたる当事者 (= 自らの課題に向き合い解決しようとする人) 自身がデザインに携わる際に参照し、応用可能な態度を明らかにすることを目的とした。調査対象は、有識者により厳格に審査され選抜される賞であり、受賞作が「優れたデザイン」である客観的な妥当性を一定程度有することから、グッドデザイン賞受賞者を対象とした。

2. 研究方法

(1) 調査方法と実施時期

1件あたり約60～90分間の時間を使用して、オンラインでの半構造化インタビューを2024年7月～8月に11件実施した。

(2) 調査対象者

本研究の目的は、デザインにおける当事者、つまり組織や集団の中で課題を持ちながら、その解決のために創造的な行為を行う人のデザイン態度を明らかにすることである。そこで、グッドデザイン賞受賞者のうち、業務の一環としてのみそのプロジェクトに関わった参加者ではなく、自身の抱える課題を解決するためにデザインを行った当事者を対象とした。その中でも主として特に優れたデザインとして高く評価された「グッドデザイン・ベスト100」以上の上位賞受賞者に実施した。

(3) 分析方法

先行研究のうち Michlewski (2015)、安藤 (2018) を踏まえ、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) を用いた。また、さまざまな手法のある GTA のうち、社会的な事実は複数あり、過程論的であり、構築されるものであるという前提に立ち、構成主義的グラウンデッド・セオリー・アプローチを採用した。まず、インタビューでの語りからデータを意味のある一区切りごとに分け (切片化)、その区切りに名前を付与する初期コード化を行い、次に、意味の近いコードを固め、より抽象度の高いコード名を付与する焦点化コード化を行った。そのうえで、焦点化コード

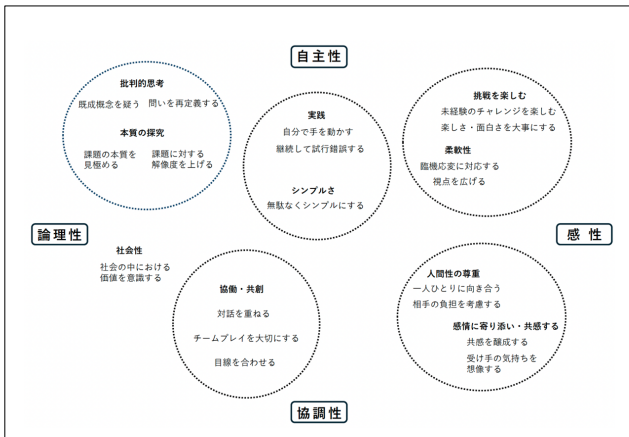


図1. カテゴリー関連図

をさらに精緻化し、理論的カテゴリーを構築した。カテゴリー間の関係性を把握し、カテゴリー関連図(図1)として描き、最終的に関連の強いカテゴリーを収斂し、態度として定義した。

3. 分析結果の考察

分析の結果、次の5つのデザイン態度を抽出した: ①批判的思考を持ち、本質を探究する、②協働し共創する場を育む、③シンプルさを追求し、実践し続ける、④人間性を尊重し、感情に寄り添う、⑤柔軟な発想で、新たな挑戦を楽しむ。また、こうしたデザイン態度の根底に、「社会の中における価値を意識する」という信念を確認した(図2)。



図2. 5つの態度と1つの信念の概念図

抽出した態度のうち4つについては Michlewski (2015)、安藤 (2018) の研究との共通点を確認できたが、唯一先行研究の定義と異なる要素として、「③シンプルさを追求し、実践し続ける」が抽出された(表1)。Michlewski (2015) は「不確実性やあいまいさを受け入れる」「複雑性から新たな意味を見出す」、安藤 (2018) は「あいまい性を保持する」をデザイン態度として定義しており、あいまいさや複雑性といった不確実な要素をそのまま受け入れ、矛盾を新たな創造に生かすという傾向が見られたが、今回の調査では、そうした複雑性は単純化し、ステークホルダーにわかりやすく提示することが必要であるという傾向が見られた。差異の背景として、当事者の課題に向き合うデザインプロセスは、デザインに取り組む本人がデザインの専門家ではないことも多く、さまざまな背景を持つ人々と協働で行うことが多いため

	Michlewski (2015)	安藤 (2018)	本研究
		論理性を重視する 問題解決のプロセスの論理性と必然性を重視する 深い洞察を得る 現象をありのままに捉えて本質を捉え、問題の再定義を促す	批判的思考を持ち、本質を探究する 取成概念を疑い、問い自体を突き詰めて考え、改めて定義し直す
共通する態度	深い共感に従事する 直感と謙虚さを持って顧客に深く共感する		協働し共創する場を育む 対話を重ねて価値基準を合わせ、チームで事にあたる 人間性を尊重し、感情に寄り添う 相手の気持ちを想像し、人間性を尊重する
相反する態度	遊び心を持ってものごとに命を吹き込む 根本的な質問をして、ものごとの凝りかたまった考え方に挑戦する	新しい文化や意味を創造する 理想的な状況を目指し、新しい文化や意味を創造する 喜びを与える ユーザーやクライアントに驚きやよりよい体験を与える	柔軟な発想で、新たな挑戦を楽しむ 新しさや偶然性を楽しみながら、臨機応変な対応をする
該当なし	不確実性や曖昧さを受け入れる 複雑性が高い創造的なプロセスの中で、不確実性をうまくコントロールする 複雑性から新たな意味を見出す 矛盾する多様な視点に従事し、調和させ、新たな知識を獲得していく	あいまい性を保持する アイデアのひらめきを生むためにあいまい性を保持する	シンプルさを追求し、実践し続ける 複雑な要素を単純化し、共通理解を醸成したうえで実践を続ける
	五感を駆使する よりよいソリューションを生むために五感や美の力を用いる	美しさを追求する ものごとの美しさを追求する	*一部共通点あり

表1. 先行研究との対照表

に、それらのメンバーとの共通理解を醸成するには、ものごとを単純化することで目線を合わせる必要性がより求められるものであることが考えられる。また、当事者として優れたデザインを生み出している人々は、上述した5つの態度の根底に、自らの課題に取り組んでいながらも、その解決にのみ目を向けるのではなく、利他的な精神を持ち、社会全体の価値を意識する信念を持つことが共通の傾向として明らかになった。

4. まとめと今後の展望

これまで確認されていなかった当事者自身がデザインに取り組む際に参照し、応用可能な態度について、その一端を明らかにすることができた。人間が他者と関わりを持って生活する以上、個人の抱える課題は、社会における課題と繋がっており、自分の課題に向き合うことは、他者の課題を解く手助けにもなり得る。そのような前提に立ち、自らの課題を社会全体の課題でもあると捉えて、その解決と新たな価値の創造に取り組むことは、当事者自身によるデザインの持つ大きな可能性を示しているといえる。

一方、本研究で導出した態度のうち、どの態度をどれだけ身につけていることが優れたデザインを生み出すために必要なのか、各態度の関係性については、今後の研究が求められる。また、インフォーマントの持つデザイン態度が、後天的に身につけたものなのか、個人が本来持ち合わせていた資質によるものなのかについても、さらなる検証が必要である。

参考文献

- 安藤拓生 (2018) プロフェッショナルとしてのデザイナーの持つデザイン態度 (Design Attitude) の探索的研究、立命館大学経営学部経営学研究科博士論文甲第 1261 号。
- 八重樫文 (2021) 「経営学部におけるデザインマネジメント教育のための理論的背景: デザインケイバビリティとデザインリーダーシップに関する考察」『立命館経営学』 59 (6)、pp.65-89.
- Boland, M. & Collopy, F. (2004) *Managing as designing*, Stanford University Press, California.
- Michlewski, K. (2015) *Design Attitude*, Gower Publishing Limited, England.